

くせ

吉川英治

青空文庫

家康は重大な話のうちに、ひよいと、話を聞いていない顔をす
る癖があると、何かの書に見た。信長は、癩癖で有名である。秀
吉は、太閤殿下ともなられながら、昔の小才がぬけないで人に耳
こすりをする癖があると時人に眉をひそめられた。

又、徂徠は講義のうちに、扇のかなめで耳を搔く。聖堂の学徒
松崎万太郎は、放屁癖という人に迷惑なものを持っていた。あの
謹厳な渡辺崋山に、飲むと落涙する癖があり、尾崎紅葉はその反
対に、飲むと江戸弁で啖呵を切る。近くは若槻前民政総裁は、議
会で困ると爪を噛む。

*

私の友人でユウモア作家の川上三太郎は、右の耳の疣を、弄ぶ癖がある。初めは、耳朵の端にできた小さな疣だったが、常住坐臥、原稿を書き、恋を語るまも、それをいじるのが、癖となつて——イヤ趣味なり快味と迄なつて、疣の年経ること十数年、今では、乾葡萄のような色と大きさに育つてしまい、頗るグロテスクな耳環をぶら下げている。

それにも増して、汚ないのは、越後の僧良寛である。人と対坐しながら鼻くそを丸める。わけて気に食わない来客が、五合庵を訪ねなどすると、よけいに、それを丸めて、頻々と指先から飛ばすので、たいがいな面の皮の人でも、恐れをなして逃げ帰つたという。

*

良寛の鼻くそでは、逸話がある。

町名主の家へ、かれは或る時、茶の会に招かれた。主は茶のたまえが自慢である。客も各しかつめらしく並んでいたが、ひとり良寛だけが、ぽかんと、退屈そうだった。

むずむずと、かれの癬が初まった。良寛は、たんねんに拵えた丸薬大の鼻くそを、場所がら飛ばしかねて、右にいる人の袂へ、そつと、こすりつけようとしたが、その人が、袂を引いたので、今度は左側の人の袖へ持つて行った。所が、その人が、良寛の癬を心得ているので、オツと、そうはさせないと、袖を交して、御免蒙った。

良寛は、困った顔をしたが、結局、それを元の持主である自分の鼻のあたまくつつけて、澄まして、お茶を御馳走になつていた。

*

他人の癖は、すぐ見つかる。そして気になる。ところで自分の癖は——と僕自身を検討してみると、癖なんか、無いように考えられる。

だが、そう考えるのが、すでに一癖かも知れない。妻などにいわせたら、さだめし沢山あるだろう。癩癖、失忘癖、沈黙癖、夜更し癖、間食癖、妻君一喝癖、等々々。

そういえば、僕は埃嫌いだ。机の上を、吹く癖がある。どうい

うものか、人一倍眼がよく見え過ぎるので、かすかなる毛埃も気にかかる。インキ壺を吹く、書架を撫でる。外出する際、帽子にブラシユをかけて渡してくれても、いちど指で、埃を弾く。

*

失忘癪に至つては、僕も人後に落ちないものがある。自分でも屢 おかしくなるのは、昼間便所へはいる際に、電気のスイツチを捻つてはいたりする。

妻は、経済観念から女中や書生たちに、便所の電気は出る時には消して下さいといつてある。所が、電気は夜半も点け放しになつてゐる。あなたでしよう、と僕へいうから、イヤ僕は消したつもりだが、と自信をもつて言ったが、後でよく考えてみると、自

分は、はいる時には点ける事を忘れて、出てくる時に、スイツチをひねつて来たのであつた。

*

手帖、ハンケチ、万年筆、すべて僕は身につけて歩く物は嫌いだ。一切持たない。旅行の際には、時計だけはぜひ必要なので、それだけは腕にはめているが、或る時、それを外すのを忘れて、温泉にはいつてしまったことがあつた。

急用で、高円寺から万世橋の駅まで電車券を買つた。廿銭出したら一銭銅貨を一枚オツリに渡されて、改札まで来ると電車はもうプラットホームに来ている。乗りおくれまいと、急いで改札に銚子を求めたが、なぜか、その駅員は私の顔をじつと見たまま、切

つてくれないので、電車は出てしまった。

私は、故意のように、悠長な駅員の態度に、軽い腹立たしさを感じて、なぜ切らないかと咎めたら、駅員は儼然として、

『でも、銅貨は切れません』

と、いった。

気がついてみると、私は、切符は左の掌の中にかたく握って、一銭銅貨を、彼氏に対して突きつけていたのであった。

*

写真を撮る時、首を曲げるのは、私の癖だと人にいわれた。そういうえば、どの写真も、少し曲がっている。曲がるなどいわれると、よけいに曲がる。

人と話す間も、曲がるらしい。歩いている時も、曲がっている。こんなのは、癖としては、軽い。

原稿を書く場合には、ずいぶん癖らしいものが発作する。机の埃を吹くのは、前にいったが、少し苦吟して来ると、あらぬ方へ、眼をすえる。馴れない女中は、恐いそうである。そんな時やむを得ない用事などを訊いてくると、とんちんかんな返辞をするらしい。

相手が、人にもものを訊きながら笑うので、何を笑う、というのと又笑う。怒ると、なおさら笑う。後で、ははあそうか、と気がつくとも自分も笑い出したくなる。

書けなくなると、ペンを紙の上へ持って行ったり、頬杖にして

みたり、同じ挙動を繰り返す。そして左の手は、指を櫛の齒みた
いにして、髪を搔く。

なおなお、書けなくなると、今度は、机の上にあるマッチや煙
草の箱に、ボチボチと、無意味に星みたいなものを書きならべる
のだ。ボチボチと考えのつく迄、無数の点を書きつめるのである。
僕が徹夜をした翌る朝など、机の上を見た弟が、それを見つけ
る、

『兄貴は、ゆうべも書けなかったらしい』

と、茶の間へ行って、みんなに、囁くそうである。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻35 七癖」作品社

1994（平成6）年1月20日第1刷発行

2000（平成12）年1月30日第2刷発行

底本の親本：「吉川英治全集・47 草思堂随筆」講談社

1970（昭和45）年6月20日

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

くせ

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>